大丈夫よ！お母さん！

vol.28

教育コーディネーター　中西美沙子

（今回のテーマ）

命をいただく

子どもと関わっていると、驚かされることがあります。それは「生き物」が好きな子どもがとても多いことです。

私の主宰する文章教室に、「カバ」に強く惹かれる生徒がいます。彼は小学3年の時に教室に入ってきました。生き物の生態や歴史に詳しく、私は早速、「生き物博士」と彼を名づけました。子どもが「興味」や「好奇心」を抱くきっかけの一つに、生き物があります。生き物は「謎」のように、子どもの心を時めかすようです。

子どもたちは動物園や水族館が好き。ありふれた生き物や、爬虫（はちゅう）類がかわいいという女の子もいます。

大人とは「忘れることに意味がある」という存在ではないか。そう思えることがあります。幼い頃、私はキリンが好きでした。のんびりと首を伸ばして、何を考えているのか不思議でなりませんでした。

大人は何かに意味があると考えがちです。でも子どもは、生き物をダイレクトに感じる力があるようです。

「生き物」と「人間」との差は何でしょうか。人間は「考える人」として誕生しました。動物や植物は、必要なものだけを糧に生きています。花は自分の遺伝子を残すために咲き、魚や動物は生きるためにだけ餌をとります。いのちの、そのシンプルな姿に惹かれます。子どもは体で、その生き物たちのシンプルな美しさを感じているのかも知れません。

時代のせいでしょうか、どんなに生き物に興味があっても食卓にのる魚や肉が、どのように自分の口に運ばれるか、わからない子どもがたくさんいます。

名古屋の水族館が売りにしているイワシのトルネードをテレビで見たことがありました。イワシが大きな魚から逃れるために大群となって回遊する姿です。生きるために群れをなす習性は、目を見張るものでした。その風景を子どもたちは見つけていました。そして動きが雪崩のようになると、どよめくのでした。でも、そのイワシやアジを私たちが食べていることを知って見るほうが、驚きは増すように思えるのです。それは「人は他の生き物によって生かされている」と実感できるからです。

母はよく魚屋さんから、切り身ではない魚を買ってきました。一本の魚を器用に調理してテーブルにのせるのでした。身をできるだけ残さず骨を取り、塩焼きにしようか煮付けようか、思案している姿が今でも目に残っています。

食を通して「野菜」や「魚」「肉」の話を、子どもとするのは楽しいものです。アスパラガスがどの土地で生まれたか。この鳥は、東北の比内鶏（ひないどり）、このカツオは舞阪の漁港であがったものなど。

今の時代の子どもは「学ぶことの結果」を親たちに強いられる傾向があります。食に対しても、「栄養」という物理的なものだけに心が注がれるとしたら、さみしいことですね。

生き物と食は、切っても切れないもの。それらに関心を抱き続けることで、人生は輝きを増していくのでは、と思えます。

カバをこよなく愛する子は、今は高校3年生になりました。生態学かバイオに関する学部を専攻したいと彼は言います。その目の先に彼が見ているものは、何なのでしょうか。

Profile

教育コーディネーター
中西美沙子

静岡大学客員教授。文章教室「スコーレ」画廊「キューブブルー」などを主宰。文章教室は書き方を教えるだけではなく、生き方や考える視野を学ぶところです。

問 tel 053-456-3770

中西美沙子　検索

ピアニシモでね

中西美沙子 著

著書の「ピアニシモでね」（東京書籍）は、中日新聞に連載された人気コラム「つかまえて！こころ」をまとめたもの。同著には、親子の問題もいろいろ描かれています。（税込1,500円）
※お求めは浜松市内の谷島屋で。